

<特別研究会報告要旨>

(10月8日)

環境・経済統合勘定の現状と課題

(熊本大学) 有 吉 範 敏

1. はじめに

1993年、国際連合統計部は、自然環境と経済活動の相互関係の把握、および持続可能な開発のためのマクロ・経済指標の開発を目標に、環境・経済統合勘定(SEEA)の暫定版を公表した。SEEAは、国民勘定体系(SNA)の構成要素の一部である投入・産出表や非金融資産表に環境フローや環境ストックを導入することによって構築されたもので、SNAのサテライト体系として位置づけられている。

これに対して、その後、オランダ統計局のS.J.Keuningを中心とするグループは、社会会計行列(SAM)表示のSNAフロー体系に、物的単位の世界環境勘定を付加することによってNAMEA(National Accounting Matrix including Environmental Accounts)と呼ばれる勘定体系を提案している。

このような環境勘定に関する研究は、①勘定フレームワークの設計、②データの推計、③分析・政策への適応、の三つに大別されると思われるのが、ここでは、これらの視点から環境・経済統合勘定の現状と課題について報告する。

2. SEEAとNAMEA

わが国では、経済企画庁がSEEAに沿った調査研究を行っていることもあって、SEEAに比較してNAMEAの情報はあまり多くない。しかしながら、NAMEAは欧州諸国を中心にかなり広がっており、国際的にはSEEAよりもポピュラーな勘定体系となっている。その最大の理由は、SEEAが環境調整済国内純生産(EDP)という貨幣額表示の単一マクロ集

計量を提示するのに対して、NAMEAが物的環境勘定に基づいて環境テーマ別環境負荷指標を具体的に提示することにあるだろう。

3. CSEEAとGAMEE

他方、有吉は、SEEAの基本構造をSNAのフロー・ストック完全体系の観点から拡張したSEEA完全体系(Complete SEEA; CSEEA)の提案を行った。SEEAはSNAの構成要素の一部である投入・産出表などを基礎にして構築されているのに対して、CSEEAはSNA中枢体系のフロー・ストック完全体系をSAM形式で表示し、これに環境関連項目を直接導入することによって開発された包括的勘定体系である。

また、CSEEAはストック勘定を完備している点でNAMEAの拡張体系でもあるが、その最大の特徴は、SEEAやNAMEAと違って環境と経済の国際関連を詳細に表示できる点、またEDPに代表される単一マクロ指標を積極的に掲げるのではなく、必要に応じて様々な種類の指標づくりやモデル分析等に役立つ包括的基礎情報システムを目指すところにある。

さらに、有吉は、CSEEAの精緻化と物的勘定の明示的導入により、①SNA中枢体系をベースとした上に、②貨幣的環境・経済勘定体系(MAFEE)と③物的環境・経済環境体系(PAFEE)を併せ持った勘定体系—GAMEE(Global Accounting Matrix for Environment and Economy)を提案している。

4. SEEAの改訂

こうした中、国連統計部は2000年の完成、2001年の刊行を目標に、各国専門家の協力の下、SEEAの改訂作業に着手している。そこでは、勘定フレームワークの設計はもちろん、分析や政策への適用も重要な課題となっており、今後の動向が注目されるところである。

(文責・矢部光保)